

二〇一七年、十二月。

「カズよ、おまえさ、どういうのそれ？」

「どういうのって何だよ？ だいたいいつから俺のことをカズって……」

佐伯が「あっ」と言っている間に、笹野は佐伯の皿からピザの最後の一切れを奪って頬張った。

湯島のイタリアンダイニング。僅かに上気した頬をリスのように膨らませている笹野を見遣りながら、最後にここへ来たのは俺が警視庁へ舞い戻った日だった、と佐伯は振り返った。

あの時も大輔と一緒にだった。

ピザをノンアルコールビールで流し込みながら笹野は手を上げてウェイターを呼んだ。今度は暴君ハバネロなどという名前を聞いただけで口から火が出そうなどピザを注文し、佐伯へ視線を向けた。口を尖らせて拗ねている。

「まあ、俺は年下だし、直樹のように行かないかもしれないけれどさ……。なんつーか、もう少しさあ」
急にもじもじするから笑ってしまう。

「何なんだよお前は」

「笑うなよ」

真つすぐに顔を上げて、豪快に涙をすすった。至極真面目な顔をする昭和の良き男児になる。醬油顔の代表だ。

「そろそろ相棒として認めてくれちゃってもいいんじゃないかね？」

二人が公安部へ異動してから二ヶ月が過ぎようとしていた。特殊犯に長くいた笹野大輔は良くも悪くも公安の顔となるのにそう時間はかからず、身体組織が正義感でできている遠山は早々と窓際族へ落ち着くことに決めたらしかった。しかし、佐伯はまったく違った。作戦のたびに疑問を感じる。公安部員全てが仲間であり、全てが敵。気を休める時間と場所がない。

直樹がいたころは違った。あの時には真鍋がいて、倉沢もいた。そして、朝倉も二階堂も。俺は大部屋で人生を満喫し

ていた。辛いことだらけだったが、乗り越えて行けた。

「お前には悪いが、俺は鑑識へ戻る」

「ええええええっ？　もうかよ？」

素っ頓狂な声を上げ、笹野は辺りを見回して少し小さくなった。

「予想はしていたけどな」

「悪い」

佐伯が現場鑑識へ戻れば、公安部とはほとんど言っていないほど接点はなくなる。

「部長には言ったのか？」

「まだ」

「遠山さんもきつと反対はしないだろうな」

「そうだと良いけど」

あーあ、と言いながら笹野は天井を仰いだ。

「それなら、俺はトカゲに戻ろうかな」

「はあっ？」

今度は佐伯が驚く番だったが、そんな佐伯の目許を笹野のニヒルな視線が撫でる。

「やっぱさあ、バイク転がしてる時がいちばんしつくり来るんだよな俺」

—— グリップを握りしめるグローブの手にふわりとした感触がきて ——

今と同じ場所で同じ笑みを浮かべながら笹野は追憶していた、と佐伯は思い返していた。

「特殊犯は大変だけれど、公安よりはマシかもしれないねえ」

「遠山さんが何て言うかな」

—— 背中が包み込まれる感じがした ——

「関係ねえや」

笹野の言葉に、佐伯はふつと笑った。グラスを煽る。こちらは本物のビールだ。

「それなら、また一緒に仕事できるんだな」

「そおかあ？ あれ？ そおだな？」

うへえ、などと照れ笑いしながら笹野は身体を揺すった。

——これは俺じゃない。二階堂が乗っているんだ——